

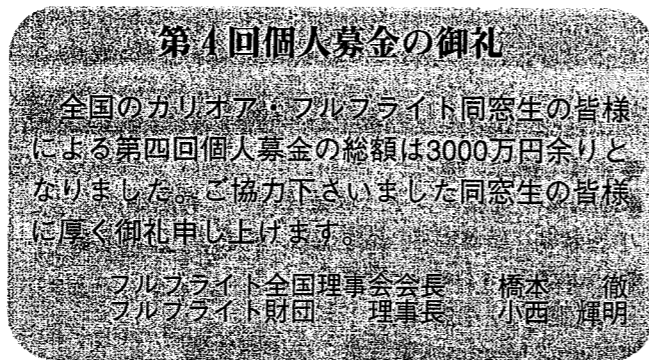
97年度寄付金総額は7800万円に

●第4回個人募金は3000万円●

1997年度の同窓会によるフルブライト財団奨学生のための募金額は7800万円になりました。

この金額から、5年に一度のGF同窓会個人募金の金額3000万円を差し引きますと、その他の寄付金額は4800万円となります。これは今までの年間募金額としては最低の部類ですが、現在の経済情勢を考えればやむを得ないことと思えます。むしろ、こうした情勢の中でも御寄付下さいました方々に厚く御礼を申し上げたいと存じます。

GF同窓会個人募金は、今回が第四回目とな



ります。過去三回はいずれも約4000万円の寄付がありました。今回は現在の経済情勢からして、半分の2000万円位かと予想していましたが、予想をはるかに超えた御寄付をいただきました。

第四回個人募金報告

募金全件数	1,440件
募金総合計額	30,012,000円
一人当たり寄付金額平均	20,842円

寄付金額別人数			
寄付金額(円)	人数(名)	寄付金額(円)	人数(名)
2,000	1	40,000	3
3,000	2	50,000	60
5,000	20	60,000	3
7,000	1	70,000	1
10,000	666	80,000	1
12,000	2	100,000	31
20,000	515	120,000	1
24,000	2	200,000	1
25,000	1	250,000	1
30,000	124	500,000	4

●高額寄付者名

50万円……内海 晃 様、高橋 剛夫 様、俣野 一郎 様
中村 幸子 様 (故中村 恵 様の奥様)
25万円……仁科 雄一郎 様
20万円……石川 吉右衛門 様

地区別件数と金額			
地区	会員数(名)	寄付者数(名)	募金額(円)
北海道	76	35	675,000
東北	169	73	2,015,000
北陸	73	21	350,000
東京	3,028	773	16,645,000
中部	240	98	2,015,000
京滋	265	74	1,865,000
大阪	475	130	2,245,000
中国	144	61	1,030,000
四国	67	23	485,000
九州	194	73	1,510,000
沖縄	185	67	925,000
国外	485	12	252,000
不明	258		
逝去	796		
総数	6,455	1,440	30,012,000

50周年記念事業 2002年に予定される日米フルブライト50周年記念事業につきましては、皆様方の積極的な御活躍を戴くことを念じております。

同期の人・専門分野の人 同期会や専門分野会を企画されるグループの方には、資料リストを差し上げております。なお、個人的に多数の方の住所等をご希望の方は、近く名簿を発行いたしますので、それまでお待ち下さいませ。

同窓会事務局 地下鉄有楽町線麹町駅のご近くで、地下鉄半蔵門線の半蔵門駅からも5分位、JR四ツ谷駅及び市ヶ谷駅から各々10分位の所です。50周年記念事業その他同窓会活動に興味・関心をお持ちの方は、お立ち寄り下さいませ。

同窓会への寄付金 下記の会員の方々から1997会計年度中に東京フルブライト同窓会宛に寄付金を戴きました。厚く御礼を申し上げます。大河原良雄、田中正之、増井志津代、橋本隆 (敬称略)



TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION
ガリオア・フルブライト東京同窓会

NEWSLETTER

No.11

DECEMBER 1998

双方向の教育交流、維持・強化を

——会長就任にあたって

東京同窓会 新会長
橋本 徹



総会後の懇親会冒頭であいさつする橋本・新会長。

今年(1998年)4月に開かれた東京同窓会総会で、今年度の新役員が承認された。それに伴い、会長職が、4年間務めた行天豊雄氏から橋本徹氏にバトンタッチされた。これを機会に、7代目会長に当たる橋本氏に本ガリオア・フルブライト同窓会の意義と課題について語ってもらった。

今年から、行天前会長より会長の役を引き継ぎました橋本でございます。これを機会に就任のごあいさつをさせていただきます。

最初から私事で恐縮ですが、私自身のフルブライトでの留学体験から始めさせていただきます。私は、1959年から翌60年にかけての1年間、カンサス州にあるUniversity of Kansasの経済学の大学院(Graduate School of Economics)に学びました。私の前の年までは、氷川丸という船での渡米でしたが、私の年から飛行機になりました。しかし、当時はまだジェット機ではなくプロペラ機で、ホノルルに給油に立ち寄りながらサンフランシスコまで約20時間の長旅でした。

今は、経済関係の大学院といえば、経営大学院(Graduate School of Business)でMBAを取得することが一般的な目的になっていますが、私が学んだカンサス大の大学院では、理論経済学や国際金融論など、あくまで「経済学」が中心で、内容的には当時の日本の大学でも教えていた近代経済学と大差ないものでしたが、教え方というか授業の様子が大分日本のそれとは違っていたことが印象的でした。

人数が20人程度と少ないこともありますが、教授

は、講義中でも疑問に思ったことがあったらいつでも手を挙げろという。そして、いい質問をする学生を評価するし、ディスカッションに参加しないと評価は低くなりました。頻りにテストやレポート提出があり、日本の大学教育とはずいぶん違うものだと感じたものでした。

当時、1年の留学期間中でも、前半で成績が著しく悪い者は日本に送り返されるという規定があったので、前半は一生懸命勉強しました。その途中の成績表は、勤めていた銀行にも送られますから、なおさらです。もっとも「ハシモトは、社交性があり、教授陣や他の学生とも積極的に交流している」という評価をもらえたようなので、幸い送り返されることはありませんでした。

とはいえ、留学の最大の目的は「アメリカという国を見てみたい」ということでしたから、勉強だけでなくアメリカ人の暮らしぶりを体験することや、フットボールの試合の応援やフラタニティでの話し合いを通じてアメリカ人学生との交流にも重点を置きました。

その印象は、「なんて大きな、豊かな国なんだ」ということでした。昨今は、アメリカに出張した日

本人ビジネスマンの多くが、「アメリカの食事はまずい」などといっていますが、当時の日本の水準から比べれば、肉がふんだんに食べられ、何を食べてもおいしい。ピザなどというものも向こうで初めて食べ、こんなにおいしいものがあるのかと感じ入ったものです。もっとも、留学の給付金は当時もぎりぎりでしたから、バドワイザーのビールは週に一度しか飲めませんでした。

6月ごろになって大学での勉強が終わると、外国人留学生のためのカウンスルという機関の催しが首都ワシントンで開かれ、それに参加して、現代アメリカ政治について研修したとき、その年、のちの大統領選挙で当選するジョン・F・ケネディと握手したのが印象的でした。ほかにサンフランシスコのバンク・オブ・アメリカでの研修などが、帰国後、富士銀行の本店外国営業部に配属された際に役立ったことはいうまでもありません。

今年10月上旬、University of Kansasのヘミングウェイ・現学長に招かれ、38年ぶりにカンサス大を訪れ、学生らに日本経済について講演してきました。今の大学院生はいったん社会に出てから再び入学してくるからでしょう、問題意識が旺盛で、私が学んだころ以上に一生懸命勉強しているように感じました。

今はインターネットというものがあるため、学生たちは、日本経済や私の職場である富士銀行について事前によく調べていて、一人で10問も20問も私への質問を用意していたので、到着した夜、分厚い質問用紙の束を渡されました。翌日は、私の講演よりも先に、いきなりQ&Aで始まり、2泊3日の滞在中、質問攻めにありました。

少し前、日本人の間に「アメリカから学ぶことは、もうなくなった」という意見が支配的になった時期がありました。しかし、この考えは、私には、思いつきのように見えません。

世界の経済はますます、グローバル化していますし、国際的紛争は絶えません。相互の国を訪れ、友人をつくりながら見聞を広めることが、国際的な理解、親善に役立つことはいくらでもありません。フルブライトの留学制度を不要とするような意見もあるようですが、この点からもフルブライトの制度は維持・強化していかなくてはなりません。

とはいえ、私が留学したころは、フルブライト以外に一般の人がアメリカに留学できる制度、奨学金はありませんでしたが、今は各企業が社内に留学制度を持つようになりました。富士銀行でも、私がフルブライトで留学した翌年から、社内に留学制度ができ



懇親会会場で橋本氏と談笑する参加者ら。

ました。そんな事情から、今フルブライトの制度の受益者は、多くが大学関係者や大学院生になりました。

これまで、フルブライトの制度でアメリカで学んだ日本人は約6000人いるのに対して、日本で学んだアメリカ人はまだ1600人ほどです。このフルブライト同窓会は、アメリカ人がもっと日本にきて日本について学んでもらうことが大切だということで、企業や文部省の寄付、援助を受けながら、アメリカ人留学生を資金的にサポートすることを目的に1982年につくられました。今では、フルブライト・メモリアル・ファンド (FMF、5、8ページ参照) として、アメリカの教員らを2-3週間日本に招いて日本を理解してもらうプログラムも始まりました。

しかし、最近の景気の影響もありまして、企業からの寄付金がだんだん減りつつあります。しかし、この双方向の教育交流を絶やしてしまってはなりません。企業としては直接利益を得られない活動と見る向きもあるのですが、これは企業の社会への貢献活動のひとつととらえ、苦しい時だからこそ支援をよろしく賜りたいと考えます。

4年後の2002年は、フルブライト制度のもとにおける日米教育交流発足から50周年に当たります。1992年の40周年に際しましては、私が実行委員長として、横浜でシンポジウムを開くなどの催しを行いました。50周年に際しても何か記念行事をぜひ行いたいと考えております。その際には、東京同窓会会員のみなさまのご協力を仰ぎたいと存じますので、よろしく願いいたします。

長文になりましたが、これを私の就任のあいさつにかえさせていただきたいと存じます。(談)

■Toru Hashimoto/1959年カンサス大大学院留学(経済学)/富士銀行会長

98年度新役員などを承認

赤坂東急ホテルで総会

早川与志子(前Alumni Meeting委員長)

ガリオア・フルブライト東京同窓会1998年度総会が4月17日赤坂東急ホテルで開催され、会員や家族など124名が集まった。

総会はず前会長のあいさつではじまった。いつも超多忙の行天豊雄・前会長は、この日も海外出張のため成田空港から直行し、息つく間もなくそのままマイクの前へ。「現在大変厳しい経済情勢である。また日米関係も再びむずかしくなっている。しかし、どのような経済的、政治的状況にあっても、本同窓会は広い意味でのNGO活動を大切にしたい」と話した。

続いて、小西輝明副会長からの募金結果の報告、加藤弓弦事務局長からは会務、会計と、現在会員名簿を作成中であるという説明がなされ、最後に97年度の役員紹介、そして98年度からの新役員が拍手で承認された。

総会の後は記念講演。今年のテーマは、今国民のもっとも関心のある経済問題。5分前の総会で会長を退任されたばかりの行天さんが「21世紀をむかえる日本経済」と題して、約1時間講演を行った。ホットな話題だけに、会員から意見、質問が続出し、会場はさながら国会中継の場ようだった。

このあと、パーティションを取り払った会場は様子が変わり、橋本徹・新会長の乾杯で懇親会のパーティーが始まった。あちこちで談笑の輪が広がり、宴もたけなわになったころ、日米教育委員会からシェパード事務局長があいさつ、またフルブ

ライト・メモリアル基金について享子・ジョーンズさんから活動の紹介があった。こうしてなごやかな雰囲気うちにパーティーは無事終了した。

4年前のある日、副会長の安成子さんから会社で電話があり、「同窓会の役員に女性が少ないので、ぜひ活動に参加してほしい。民間で働いている、現役の若い(?)女性に期待している」と口説かれた。有給休暇も全然とれない取れないほど忙しい日々を送っていたのだが、働く女性として大先輩の安さんの魅力に惹かれて、この大役を引き受けた。テレビ局に勤めているから司会ほうまいだろうと、とんでもない誤解をあえて否定もせず、役員の方々と文字通り手づくりで総会をつくってきた。この4年間で私が学んだことは、どの時代に米国留学生生活を経験したかによって、同窓会に求めるもの、あるいは共有するものが違うということである。様々な世代の違いを超え、会員の誰もが一年に一回のこの日を楽しみにしてくれることを目指したつもりである。来年からは気楽に参加したいと思う。マスコミの先輩、小中陽太郎・新委員長、よろしく。

同窓会の活動を通して、人的国際交流の重要性を認識してきたことに、そしてたくさんの同窓生に出会えたことに大変感謝している。

■Yoshiko Hayakawa/1985年ジャーナリスト留学/ラドクリフ大、ハーバード大、ノースイースタン大/日本テレビ放送網事業局プロデューサー/前Alumni Meeting委員長

1998 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEES

NAME	DISCIPLINE/TOPIC	GRANT
GRADUATE RESEARCH FELLOWS (3)		
Ms. DAVIS, Christina L.	International Relations	Japan Economic Foundation
Ms. NEITZEL, Laura L.	Japanese History	Japan Economic Foundation
Mr. PITELKA, Morgan J.	Japanese History	Japan Economic Foundation
FULBRIGHT FELLOWS (10)		
Mr. COYLE, Jeremiah J.	Film & Photo	Shino Fund
Mr. DOUGHERTY, Patrick M.	International Relations	General Alumni Fund
Mr. FROST, Dennis J.	East Asian Studies	General Alumni Fund
Ms. HOLSHOUSER, Valerie C.	Political Science, General	General Alumni Fund
Mr. LOUIE, Ryan K.	Cell & Molecular Biology	General Alumni Fund
Ms. OGAWA, Dawn D.	Public Health	General Alumni Fund
Mr. OLIVER, Michael T.	Economics, General	Toyota
Mr. POE, Mark W.	Environmental Studies	Mitsubishi Group
Ms. SCHUBERT, Lia M.	Busi. Manag., General	YKK
Ms. WRIGHT, Tomika L.	East Asian Studies	Osaka Alumni
Japanese Graduate Student (1)		
Ms. KAWAI, Junko	Educational Sociology	YKK

かつてない不信持つ海外 行天豊雄・前会長

(4月17日東京同窓会総会での記念講演「21世紀をむかえる日本経済」要録)

本日は、榊原英資氏に講演してもらいたいという希望であったのですが、現在彼はG7というところで悪戦苦闘しているということなので、私が代わりにお話をさせていただきます。

現在、海外から日本の経済に対する批判は大変厳しいものがある。しかし、それに日本人は気づいていないのではないかと懸念があります。

その具体的な内容としては、第1に日本経済が長い間1%の成長率しかなく、海外から見て海外の製品を買ってもらえるような大きなマーケットにならないという点。

第2に、世界で大きな働きをしている日本の銀行が、バブル経済後大きな不良債権を抱えているという点です。約600兆円くらいある債権のうち少なくとも30兆、多く見積つれば100兆円が、貸したのに返ってこないかもしれないということです。ほっておくと日本の銀行全体がダメになってしまうかもしれない。そうしたら大変だという懸念です。

第3は、規制が多く海外の企業が商売がしにくい日本の市場を、日本政府は改革するといっているが、それがうまくいっていないのではないかと懸念する点。金融ビッグバンが、その目指す方向に向かうのかという点です。改革のスピードが遅いと海外の目は心配しています。

日本を見る目は、不満から非難に変わってきているといってもいいでしょう。しかし、その見方は、それでも与党が政権を維持しているなど、日本人が見る見方と海外からのそれにはギャップがあるといっています。

その結果として、日本の企業の格付けや日本政府の債権の評価、さらには日本の株が下がり、130円を超える円安になっているのです。日本政府も指導力を発揮し改革の実績を作っていないと、日々悪くなってじり貧になっていくような印象があります。

私は約40年ほど外国と日本を行き来してきました。これまでは、日本の市場に不満はあっても「日本人だから大丈夫だろう」というもう一方の見方もあったのですが、最近はそのなくなり、これほど日本経済に対する見方が冷たくなったというか、不信の目で見られることは今までになかったといえます。

とはいつても、海外の国々の経済にも問題はあります。アメリカは、現在の好景気はバブルに近いと

いう見方があったり、株など資産を持っている人と持っていない人の格差が大きくなっているという問題を抱えています。

ヨーロッパは来年からの統一通貨に対して期待と不安を感じています。また、アジアの経済状況がヨーロッパに悪影響をあたえるかもしれないとも感じています。そのアジアでは、タイやインドネシアは今まさに悪戦苦闘の最中で、中国もほかのアジアの国の経済の低迷が続くと影響が出るかもしれません。だから日本を見る目が真剣になっているのです。

10年、20年前より日本の役割が大きくなっているのです。それでは、皆さんからの質問や意見をお聞きしたいと思えます。

Q アメリカもかつて日本に(大きなビルなどを)みな買われてしまうのかという時期があり、イギリスも、かつて英国病といわれ苦しんだ時期があった。日本も、成り行きに任せていると、同じような苦しい事態に陥るのだろうか?

A アメリカも、かつて経済で苦しみ社会も荒廃した時期があった。それを、小さな政府という考えに基づいた減税と、情報技術の発展で乗り切った。この点では官民まっしぐらに進み、やはり思い切ったことが必要だろう。イギリスで、なぜイギリスは立ち直ったのかと聞くと、①英国病のどん底の時期におきたフォークランド紛争で、国の尊厳、国民のあり方を考えることができた ②税率を下げた ③すぐストライキをする労働組合が王様ではないことがわかったから、という答えが返ってくる。

Q 経済政策で思い切ったことができないのは、一人で責任を持つという精神風土がないからだろうか?

A 確かに、おれに付いてこいという政治家が生まれてこないようなしくみになっている。池田勇人、田中角栄のような人はもう出ないでしょう。その意味では、ご意見に同感します。

■Toyoo Gyouten/1956年プリンストン大学/国際通貨研究所理事



講演で熱弁を振るう行天 前会長。

フルブライト・メモリアル基金の活動報告

小西輝明(東京同窓会副会長)

フルブライト・メモリアル基金(FMF)は、我々のフルブライト奨学金制度とはまったく関係がない。1996年4月のクリントン橋本会談で日本政府の提唱と拠出金により新しく日米間の人物交流プログラムが設立され、長年日米交流のシンボルとなってきたフルブライト上院議員の顕彰の意味を込めて名はつけられた。この基金の目的のひとつが米国の初等中等教育に携わる教職員を3週間日本に招聘し、実際に日本の教育現場を訪問しながら関係者と交流することである。現在は日米教育委員会が運営している。

米国人教員の交流計画は昨年6月からスタートし、3回に分けて合計500人、今年も6月から3回に分けて合計600人、計画では5年間にわたり合計5000人を招聘する計画で、各回ごとに20人ぐらいずつグループに分かれて地方の各地の学校等を訪問し、その間にホームステイなども経験する。来日される先生方は各州ごとに論文を提出し、きびしい選考を受けた人たちで、75%が女性、修士号、博士号を持った人たちも7割以上とのこと。日本も含めて初めての海外滞在の人たちも多いようで、それだけに彼らに与える日本の印象も深いようであった。

今年6月埼玉県越谷市を訪問する20人のグループに二日間同行した。訪問先は、越谷市長表敬、埼玉大学、翌日は市内最古明治6年創立の大沢小学校。グループにはすばらしい一流の通訳が同行した。このような通訳の存在が全体のコミュニケーションの円滑化に大いに役立った。

一行20名はそれぞれ異なる20州を代表してきており、サンフランシスコで1日のオリエンテーションを終え日本に着いたばかりでお互いのなじみも薄いせいも、アメリカはご存知のように各州ごとに教育制度も多少違うので、日本に来ていてアメリカの教育状況についての意見を交換して驚いたり、感心している風景がたびたび見られた。

大沢小学校を訪問する。埼玉県最古の小学校ではあるが、校舎は著しくモダン、広々として清潔であった。全校生徒が講堂に集まり、生徒たちによるブラスバンドで歓迎を受け、日米両国歌が斉唱された。小さな子どもたちが「君が代」を全員でちゃんと歌っているのには感心した。6年生の女子生徒がきれいなブリティッシュ・アクセントの英語でアメリカの先

生方への歓迎の辞をのべた。校長先生にうかがうと、彼女は6年間両親とロンドンで暮らしたとのこと。「実はああいうことをさせると、あとでいじめがあるのではないかと懸念する先生もいたが、あえて決心した」そうだ。あのあと彼女に何もなければいいなと思う。

生徒たちが全員で教室を掃除したり、校庭の花壇を自主的に手入れしているのを見てアメリカの先生方は驚いていた。2年生のクラスでは、その日の午後は親と一緒に廃品を使った材料で工作する授業で、ほとんどの母親、中には父親も来ているのを見て、共働きまたは片親の多いアメリカに比べ、親の出席率のよさに目を丸くしていた。アメリカでの離婚による片親問題の深刻さが幾度となく聞こえてきた。

昼休み、各教室で生徒と給食を済ませてから我々が控え室にいと、生徒たちがはじめは遠慮がちに、そのうち群れをなしてアメリカ人の先生から名刺をもらっていたが、面白いのはその全部が女生徒で、男の生徒は廊下でおろおろしていた。

授業後、日米の先生たちが3グループに分かれて懇談。アメリカ人側は、まず校長先生の権限について質問。「私には権限も何もないのです」。教頭先生は「私はただ校長先生のやらないことを助けている」



越谷市長を表敬訪問したアメリカ人グラントーら。

「?」。「アメリカでは在勤中に何か上の資格(MAとかPHDなど)をとらないと5年以上その学校にいられないのですが…」「日本では、時々学校を移って研修を積みます。時々行われる公の研修会に出席してもメリットにはなりません」。「?」。

ビジネスなどでもある接点のあいまいな議論が続いたが、通訳のおかげで何か理解したような気がしてホテルに戻ったが、「私にはどうしても分からない」とロビーでつぶやいていた先生がいた。

なお、各地の同窓会のみならず、毎回ご支援をいただいていることを付記しておきたい。

■Teruaki Konishi/1953年全額給費生/ノースウエスタン大経営学大学院(現ケロッグスクール)留学

出迎えした時に 微笑ましい光景

太田隆次 (ホスピタリティ委員会委員長)

①出迎えサービス

1989年に始めた「出迎えサービス」は、ボランティアと家族の方々のご協力のおかげで、1998年10月31日現在で延べ121名のフルブライトグラントイを成田空港で出迎えて、第1日目の宿泊先に無事届けました。

出迎えにまつわるエピソードは毎年ありますが、今年は宅配便の発送でこういうことがありました。

成田空港から、アメリカングランティが東京をはじめ、仙台、広島、沖縄など地方の落ち着き先宛に宅配便で送るのに、私たちボランティアは発送伝票に日本語で記入してあげたりして手伝っています。

仙台に行くグラントイが、同伴してきた13歳のお嬢さんに「全部送ってしまってもいいのかい、しばらく東京にいる間、着るドレスは別にして自分で持つんだよ」と、娘を気遣っていました。それから5日後に、日米教育委員会主催のグラントイ歓迎パーティーでその父娘に再会しましたが、見違えるような立派なドレスを着ていて安堵しました。

②1997年度アメリカ人ニューグラントイ歓迎会

恒例の歓迎会が、1997年度は11月27日(木)にグラントイと家族、冠企業、日米教育委員会、同窓会員など約80人が集まって、前回と同じ赤坂東急ホテルで開かれました。

行天会長の歓迎の挨拶の後、いつものようにアメリカングランティから、それぞれ流暢な日本語でユーモアをまぜて留学目的と自己紹介をして頂きました。

日米教育委員会のシェパード事務局長から、謝辞と1997年から始まったFMF (FYL BRIGHT MEMORIAL FUND) による、アメリカの初等中等教育の教育関係者の招聘プログラムの説明と協力の依頼があり、ビデオによる紹介では多くの出席者が熱心に見入っていました。いつものことながら、このパーティーは日本人同窓生によるアメリカングランティの歓迎会ですが、久しぶりに会う日本人同窓生の再会と談笑の場としても盛会でした。

準備・費用で改善の余地あり 宇都宮旅行と歌舞伎鑑賞教室

葛城めぐみ (文化活動小委員会委員長)

文化活動小委員会では、アメリカングランティに日本文化を紹介する活動として、今年度も宇都宮市の「いっくら国際文化交流会」とモービル石油株式会社のご好意により、2つの行事のお手伝いをしました。

1997年12月6日から8日の日程で、第8回宇都宮旅行が参加者(グラントイとその家族)計13名で行われました。これは「いっくら国際文化交流会」会員の家庭での2泊3日のホームステイを中心としたプログラムで、日光周辺の観光、藍染め工場の見学、益子焼窯元の見学(希望者は各自絵付けも)、宇都宮市庁舎に市長表敬訪問などのスケジュールも含まれます。12月の日光・宇都宮には比較的暖かい日に恵まれ、「いっくら」の皆さんの歓待を受け、参加者は新たな国際交流の経験を楽しんで帰途につきました。

1998年7月5日には半蔵門の国立劇場で歌舞伎鑑賞教室が開催されました。モービル石油広報部から歌舞伎鑑賞教室の切符をいただき、参加を希望するグラントイに配付するもので、今回は第5回目となりました。参加者はグラントイとその家族の計9名で、歌舞伎役者中村玉太郎による舞台全般の解説と、「傾城反魂香(けいせいはんごんこう)」の上演を楽しみました。終了後、国立劇場内の別室でモービル石油側の参加者の皆さんと一緒に昼食会と、ヴァレリー・ダーツムさんの英語による歌舞伎セミナーが開かれました。

どちらの行事も参加者の期待感・満足度は共に高く、今後も参加人数を増やしながら継続していきたいと考えますが、主催者に準備と費用の両方を完全に依存している現状は改善の余地がありそうです。

日光・宇都宮旅行の場合、同窓会からの補助金は、現地でのバスチャーター代で終わってますし、歌舞伎鑑賞教室の経費はセミナー・昼食も含めて、すべてモービル石油のご好意によるものです。

また、今回の歌舞伎鑑賞教室での参加者の無断欠席は、二度と起こらないように参加希望のグラントイに徹底させるべきだと思います。

■Meg Katsuragi / 1971年トラベル・グラントイ / DePauw University (Indiana) / Visiting Lecturer in Japanese

1998年度総会での各種報告

1998年度役員

- 会長: 橋本 徹
- 副会長: 佐藤ギン子(会長代行) 有馬朗人
小西輝明 松原亘子 高澤廣茂 安成子 白鳥正喜
- Foundation Liaison委員会
担当副会長: 小西輝明
- Alumni Meetings委員長: 小中陽太郎
副委員長: 油原ゆう子 / 担当副会長: 安成子
- Hospitality委員長: 太田隆次
副委員長: 葛城めぐみ / 担当副会長: 高澤廣茂
- Publicity委員長: 川村敏久 / 担当会長: 橋本 徹
- Administration事務局長: 加藤弓弦
担当副会長: 佐藤ギン子
- 監査役: 堀憲明

1997年度募金企業名(単位:千円)

企業名等	1997年度募金額	企業名等	1997年度募金額
富士銀行	4,000	Y K K	10,000
日本興業銀行	1,000	ソニー	2,500
J E F	11,840	大阪同窓会	115
三菱グループ	5,000	東京チャリティゴルフ	8,325
トヨタ自動車	5,000	第四回個人募金	30,012
		合計	77,792

1997年度収支計算書

	予算額	決算額
会費	5,000,000	4,730,600
寄付金	50,000	34,817
受取利息	50,000	65,895
募金手数料	1,789,950	1,596,450
P C 賃貸料	240,000	240,000
雑収入	150,000	1,304
収入合計 (A)	7,279,950	6,669,066
前期繰越	12,270,723	12,134,268
収入合計 (B)	19,550,673	18,803,334
旅費交通費	188,259	214,435
通信費	1,360,489	1,439,098
印刷製本費	890,000	415,760
交際費	25,000	0
什器備品	500,000	422,845
修繕費		77,083
消耗品費	10,014	11,968
支 地代家賃	374,185	288,685
会合費	130,487	185,908
倉庫料	113,842	193,929
事務用品費	125,850	265,551
の 給料手当	3,400,000	3,492,948
奨学生費	275,706	188,980
支 支払手数料	10,880	12,365
図書購入費	19,036	0
会議費	69,486	13,860
雑費	164,834	150,766
予備費	500,000	0
当期支出合計 (C)	8,158,068	7,374,181
当期収支差額 (A)-(C)	-878,118	-705,115
次期繰越 (B)-(C)	11,392,605	11,429,153

1997年度会務報告書

- 97.04.14 1997年度総会及び懇親会。パネルディスカッション、パネラー原ひろ子氏・行天豊雄氏。出席者 会員79名、その他19名、合計98名。
- 97.05.26 アメリカン・フルブライターの為に最高裁判所及び国会の見学会 参加者19名。
- 97.07.06 アメリカン・フルブライターの為に東京国立大劇場にて歌舞伎鑑賞 出席者15名。
- 97.08.09 アメリカン・フルブライターを成田空港に出迎。
- 97.11.17 第22回日米交流チャリティ・ゴルフ大会。参加者172名。募金額 7,705,000円。
- 97.12.06-08 アメリカン・フルブライターの為に宇都宮ツアー(日光東照宮、益子焼きなど)2泊3日。参加者15名。
- 97.11.27 アメリカン・フルブライターの歓迎会。出席者 75名。
- 97.12 Newsletter No.10 を発行。
- 97.11/98.03 企業募金及びフルブライト同窓会第四回個人募金。
- 98.03.30 東京同窓会役員会。

1998年度収支

収入の部	19,042,563
前期繰越	11,546,163
会費	5,000,000
寄付金	42,500
受取利息	57,500
募金手数料	2,156,400
P C 賃貸料	240,000
雑収入	
支出の部	8,492,067
旅費交通費	199,427
通信費	1,399,092
印刷製本費	890,000
交際費	12,500
什器備品	500,000
修繕費	77,083
消耗品費	10,901
地代家賃	374,185
会合費	158,198
倉庫料	193,929
事務用品費	180,848
給料手当	3,492,948
奨学生費	232,343
支払手数料	11,623
図書購入費	9,518
会議費	91,673
雑費	157,800
予備費	500,000
次期繰越	10,550,496

■Ryuji Ohta / University of Virginia, University of Wisconsin, 1967-69 / 国際人事研究所所長